

自由工房

■子どもたちの粘土開放日

今年度も、友の会より寄贈された土練機と1tを超える量の水粘土を使用し、少量での物作りとは違った感覚で粘土遊びを体験する会を実施した。親子での参加を基本とし、午前と午後の2つの時間帯を設けた。技術的指導はなし。

年々、参加者が増加しており、何度も参加してくれる親子がいる一方で、毎回、新規の利用者も半数以上を占めることから、この事業が地域に根を下ろし、広がりを見せていることが感じられる。継続することで人々の意識に浸透し、良い結果を上げている例と言える。

この粘土開放日をはじめ、実技講座、粘土ワークショップで実技室ボランティアさんにお手伝いいただく場面が今年度も多数あった。平成12年度から呼びかけに応じていただいております、なくてはならない存在である。(実技室ボランティアの皆さん＝朝倉文雄・久米妙子・原千晴)

期 間＝毎月第4日曜日を基本とし本年度は計12回実施した。

講 師＝石上和弘(彫刻家)・持塚三樹

場 所＝当館実技室

参加者数＝2508名

■夏季自由工房「刻もう思い出、夏の色」

日 時＝平成16年8月10・11日

10：15～16：15

講 師＝奥中章人・三浦香織・志村てるみ

場 所＝当館実技室・展示室

参加者数＝35名

夏休み中に開催された収蔵品展「色、いろ、イロー色彩の交響曲―」の鑑賞と実技をあわせたワークショップを開催した。

このワークショップは、まず展示室での鑑賞から始まる。参加者は出品作品の色彩表現をじっくり味わいながら、手渡された20cm×30cm程の大きさのスチレンボードに気に入った色の形を鉛筆でスケッチしていく。幾つかの作品の形がスチレンボードの上で重なり合い、原作とは違ったイメージになっていく場合も見受けられた。次は実技室に戻って、いま描いてきた形を線に沿ってカッターで切りとる。どの線を選んで切るか考えながら作業を進め、それぞれが世界に1つしかない自分の雲形定規を完成させた。

昼食をはさみ、午後からはこの定規を使っての作品制作となる。別のスチレンボードに定規を当ててカラー

のサインペンでなぞる。色を変え、位置を少しずつ変えながら何度も線を引いていくと、画面には色鮮やかな線のリズムが刻まれていた。最後に画面の一点に穴を開け、時計のキットを取り付けて完成。美術館で過ごした夏休みのひとときの思い出を、参加者それぞれがお持ち帰りいただけたと思う。

■粘土開放日 番外編

開催日＝9月20日(月・祝)

10：15～15：00

講 師＝石上和弘(彫刻家)・持塚三樹

場 所＝当館実技室

参加者数＝85名

<彫刻>と<工芸>―近代日本の技と美展の会期中、粘土開放日の番外編を開催した。通常の粘土開放日と違い、角材の芯棒を使用した粘土塑造を体験してもらう企画である。参加者は素材の重さや感触を感じながら芯棒に粘土を付けていき、全員が協力して高さ3mほどのキリンを作り上げた。子ども達は完成作品にまたがって写真を撮るなど大喜びで、自分の体よりはるかに大きな粘土塑像の制作を存分に楽しんでいる様子であった。ロダン館のブロンズ彫刻の鑑賞にも通じる、発展性のある試みであったと考えている。



<夏季自由工房「刻もう思い出、夏の色」>